

昔話からみた津軽の鬼

入江 英 弥

一 問題の所在

(1) 津軽の鬼に関する研究

従来、津軽の鬼に関する研究としては、弘前市鬼沢に鎮座する鬼神社にまつわる鬼伝承を対象にしたものが多い。一般に鬼は畏怖される存在として捉えられる。それに対して鬼沢においては、岩木山の赤倉に棲む鬼が人々のために水路を造ったなどといい、人々に恩恵を与える存在として伝えられてきた。こういった特異な存在であることから、研究者の関心を集めてきた。

まず、水路を造って人々に恩恵をもたらしたと伝える点から、この鬼は農耕神としての性格を持つと考えられた。大湯卓二氏は、鬼が最終的には山に帰ることから、春に里に降りて収穫が終わると山に帰るといふ農神が去来する伝承に連なるのではないかと推測する⁽¹⁾。また、畠山篤氏はこの伝承を生活にとって重要な水利の面から捉えて、その機能を考察されている⁽²⁾。

そのほか、鬼沢の伝承に鉄生産や、土木技術に関わる点がみられるため、非農耕民の姿がこの鬼に投影されているのではないかと考えられてきた。内藤正敏氏は、岩木山の赤倉側の山麓一带に数多くの製鉄遺跡が発見されたことから、古代にこの地域に製鉄民が存在し、それがこの伝承の背景にあると説く。さらには、そうした製鉄民は中国大陸や朝鮮半島から鉄の技術を持ってやって来た渡来人ではないかと推測する⁽³⁾。この考えは、鬼伝説と製鉄が密接な関係にあることを主張す

る若尾五雄氏によって支持されている⁽⁴⁾。

近年では、鬼沢において弘前大学文化財論講座による民俗調査がなされている。その成果をまとめた報告書『弘前市鬼沢 鬼神社の信仰と民俗』において、山田巖子氏が従来の研究を紹介していて参考になる⁽⁵⁾。これまでの研究では、おもに鬼の原像に焦点が当てられてきたといつてよい。

なお、鬼に関する研究文献については、拙編「鬼をめぐる文献目録」を参照されたい⁽⁶⁾。

(2) 問題点

このように人々に恩恵を与える鬼が研究対象にされてきたため、ほかから見ると津軽において鬼が正の存在として伝えられてきたという印象を持つてしまう。だが、筆者が受け持つ授業の受講生諸氏に鬼について尋ねてみると、圧倒的に負の存在としてのイメージを持っている人が多かった。少数ながら鬼沢の伝承を知っている人がいて、たとえば、青森市浪岡の学生Aさんは母親から「鬼沢には鬼がいて、水路を造ってくれたという話があつて、鬼が守る鬼沢なんだ」と聞いたという。

実際に、津軽において鬼がいかに語られているのであるのか。本稿では、昔話に焦点をあて、今日の伝承の実態と、人々が鬼をどのような受けとめているかについて明らかにしたい。

調べてみると、人にとって負の存在である鬼を主人公にする話と、

人々に恵みを与える鬼を主人公にする話とが並行して語られているほか、負の存在だった鬼が改心して正の存在になったとする話も伝えられている。悪鬼から善鬼へと切り替わったと説く話であり、先の負の存在としての鬼の話と正の存在としての鬼の話を橋渡しするかのような話である。こうした実態をいかに考えるべきであろうか。昔話の分析を通して私見を述べてみたい。

まず、負の存在として語られる鬼を取り上げることにする。なお、津軽には人を食う鬼が人の機知により殺され、その死体から人の血を吸うノミやシラミが生じたなどといった昔話がある⁽⁷⁾。

二 負の存在としての鬼

(1) 岩木山の鬼にまつわる昔話

①事例

車力村^{しやうりく}(現、つがる市。以下、車力と記す)に次のような昔話が伝えられている。

岩木山の鬼コ

むがし、むがしの大昔ね、津軽の国で大地震ア起きで、地面モコラ、モコラど動いだケァ一晩げに盛り上がって、雲の上さ頭かぐしほどおがってしまったど。それごとば岩木山って呼ぶようになつたあど。

まん中の高げどごば鳥海山、左の方ば^{がんきさん}巖鬼山、右の方ば赤倉山ってしたど。

どうして岩木山三つに分れているやだべと思うべエ、それあア、もつとまだまだ大昔ね、岩木山に赤鬼ア一匹住んでいであつたど。その鬼ア、ちよこちよこ村さ下りできては童子どばさらって行く

ど。それで困ってしまったて、村の人ア観音様さ願かけすることに なつたど。そしたけア、観音様のお告げあつてなんとかしてあげるからと言つたど。

観音様ある日、鬼ば呼んで、「お前を岩木山に置くのは、獣や毒蛇を退治するためだ。それなのに村人にいたずらばかりしている。今後やめなさい」と、きつく叱つたど。それから、鬼アよくなるべがと思つていたども、それでも、なんもよぐならねど。

観音様また鬼ば呼んで、「お前と賭してみるべ、お前勝てばこのまま、この山さ置くし、負ければ天さ連れで行く。どうだ」つて聞いたど。そしたけア鬼ア「このまま、ここにいろ」つてしたど。

「せせば、この山のほかにもう二つ山、こさいでみれ、それも一晚のうちにだよ。明日の朝お天道様昇る前にだ。どうだ」それ聞いて鬼アいい気になつて「ウンよがべ、よがべ」と承知したど。

いよいよ、その日になつた。鬼ア早速、大きなモッコで石を運んで来て、左の山一つこさいだ。右の山も、もう少しで出来上がる頃になつたけア、東からお日様昇つてきて出来なくなつて鬼ア賭に負けだど。それで右肩低いんだど。負けだ鬼ア岩木山にいらいねぐなつてまつたど。

それで山もおさまり、今のようにとごがら見ても、いいお山になつたど。とつちば⁽⁸⁾れ。

②内容の分析

岩木山は三つの峰からなり、それぞれ少しずつ高さ異なる特徴ある山容のため、遠くから見てもよくわかる。眺める位置によって山の姿が違ふことも特徴の一つであろう。この話では中心を鳥海山とするが、一般に中心の峰を岩木山、その南西に位置する峰を鳥海山、北東に位置する峰を巖鬼山、あるいは赤倉山と呼ぶ。この昔話は左右の峰

の高さがなぜ違うかを説明する話である。

次に話の筋に沿って分析してみたい。

a 大昔、津軽に大地震が起き、地面が一晩で盛り上がりたててきたのが岩木山だという。

岩木山の成り立ちに関して、大地震によって地面が一晩で隆起した結果だと説明する。とくに、岩木山が一晩でできたとする。おそらく、この山の神秘性をものがたろうとして「一晩で」という表現になったと考えられる。また、後半にみられる鬼が一晩で山を造るという話の伏線になっているとみることもできる。

ここでは、山の生成を神や巨人の力によると説くのではなく、大地震のために土地が隆起したことに基づくとする。背景に大地震の脅威や、自然への深い観察があると考えられる。

b なぜ岩木山の頂が三つに分かれているのかというと、昔、岩木山に赤鬼が住んでいて、里に下りて来ては子どもをさらって行った。最初にこの話がなぜ岩木山の峰が三つに分かれているのかを説明しようとするものだと言って、話の導入にしている。そして、昔、岩木山に棲む赤鬼が里の子どもをさらったと説く。子どもをさらわれれば、その家は跡継ぎを失って滅びる。つまり、里の人々に敵対する負の存在としての鬼がいたというのである。

c 村人は困って観音に助けを求めると、観音が鬼を叱った。

人々は観音に助けを求め、観音はその願いを聞き届けたとする。これは、観音の利生を説く場面である。観音菩薩は困った人々の願いを必ず聞き入れて苦難を取り除き、利益をもたらすという仏教の知識を反映したものである。よって、この話を仏が人々に恵みを与える話の一つとして理解することもできる。

d 鬼が言うことを聞かないので、観音が勝ち負けで決しようともちかける。

鬼の所業が改まらないため、観音が一計を案じる。それは、一晩のうち二つ山を造ることができたならば鬼の勝ちで、このまま山に住んでよい。できなければ鬼の負けで、天に連れて行き、山に住めなくなるというものだった。おそらく、鬼が相撲を取る話が多く、そこから勝負ごとを好むとみられ、そうした性格を利用してこの勝負に乘らせたと考えられる。この点からは、知恵によって困りごとを解決する話とみることができる。

鬼が相撲を取ることはよく知られている。たとえば、車力に伝えられた「鬼の角力取り場と深沢の地藏さま」と題する話に次のようにある。

むかし、むかしにあつたど、深沢の山の奥に鬼ア居で角力取つていだものだと。そこば鬼の角力取り場つて名前ばつてで、誰^だアもおかね（こわい）がてそば行がねがつたど。

山奥で鬼が相撲を取っていたという話は、ほかに赤倉山の「鬼の土俵」などがある。人々が畏怖する場所であり、本来は聖域を示す伝承なのかもしれない。

e 鬼は左の山を造り上げ、右の山を造っていたが、もう少しで出来上がるというときに太陽が昇って、鬼の負けとなった。

鬼は約束の時間までに二つの山を造ることができるかで勝負を争ったが、完成まであとほんの少しのところできず、負けとなったという。鬼が山を造りあげようとする。すなわち、鬼が大地の加工を行ったというのである。これは、「大人^{おおひと}」と呼ばれる巨人が山などを造ったと説く巨人伝説に重なる話である。津軽では鬼が大人と同一視される場合があり、それが当地方における鬼の特徴の一つとなっている。

そして、約束の時間までにある仕事量をこなせるかで勝負をつけようとする。おそらく、この背景には、一定の時間内に定められた仕事

量をこなすことができれば一人前として認められるという考えがある
と推測される。

結局、鬼はあと少しのところで定められた仕事量をこなすことができずに終わる。左の山をモッコで石を運んで来てせつせと造り上げ、右の山もあと少しで完成するところ、ここで時間切れとなってしまう。スリルを感じさせ、これがこの話のおもしろみとなっている。

f それで右の山が低いのだという。

岩木山の姿の成り立ちを説く。鬼が完成させられなかった結果が、今の山容につながっているとする。今日の形を鬼の失敗に求めている、聞き手に興味を持たせる内容になっている。鬼のしくじりという点からは、この話を笑い話と受け取ることもできよう。

g 負けた鬼は岩木山にいらなくなり、山はおさまったという。

鬼は観音との勝負に負け、山にいられなくなったとする。

要は、この昔話は、仏の力を借りて、人にとって負の存在である鬼を岩木山から追い払った話とみることができる。山から鬼がいなくなり、観音の力によって平和が山、さらには里にもたらされたと言っているのである。



岩木山 りんご公園より

(2) 岩木山の姿を説明する話

① 類例

この昔話は、これまでの報告例からすると、斎藤正氏編『津軽の民話』に収められた「岩木山と鬼」と題された話に近い。これは弘前市在府町に在住する方から聞いた話であるという^⑩。概要を記せば、次の通りである。

津軽の目屋に国吉という所があり、おばあさんがある朝眺めると、突然大地が動き出し、高く盛り上がる。それを周りの小さな森山がおんぶして今の場所に据え付けた。これが岩木山で、山の頂は三つに分かれていて、左肩が右肩より少し低い。これにはこないわれがある。

昔、岩木山に鬼が住んでいて、子どもをさらった。村人の悲しみの声を聞いた天の観世音菩薩が気の毒に思い、鬼に子どもをさらうことを禁じたが、鬼は「人を食べないと生きていけない」と言って断る。そこで観音は、一計を案じて賭を持ちかける。太陽が昇る前までにモッコで土を運んで山を造りあげるといふものだった。鬼が右の肩をこさえ、モッコをあと一回運べば左の肩ができあがるというところで、太陽が昇ってしまった。鬼の負けとなり、厳鬼山から天に連れ返され、この世に平和が訪れた。そのため、岩木山は左の肩が少し低くなっているのだという。

この話では、岩木山の生成に関して、突然高く盛り上がった土の塊を小さな山がおんぶして据えたものと説く。これは、岩木山が手前に見える小さな山々に背負われているかのように見えることに基づいて形成された話だと考えられる。

内容としては、鬼が子どもをさらい、観音がそれを止めさせるため

に一計を案じて勝負を持ちかける。それは、一晚のうちに岩木山の両脇に山を造るというもので、結局片方が完成せず、鬼は山から天に連れ去られる。そのため、一方の肩が少し低いのだというものである。これは、先の昔話とほぼ同じ内容の話だといってよい。

岩木山の形の由来を説く話はさまざまに語られてきたようで、斎藤正氏は『続々津軽のむかしこ集』において「右肩の少し低いわけ」と題する話も報告している⁽¹⁾。次に概要を示す。

昔、赤倉に鬼が住んでいて、神の言うことを聞かず、人を食べていた。そこで神は一計を案じ、鬼に一晚のうちにモッコ一つで山を築けと命じる。あと一回運べば出来上がるところで、太陽が昇ってしまう。鬼は負けて天に連れ戻され、そのため右肩が低くなったという。

この話では「観音菩薩」ではなく、「神さま」となっているが、内容としては先の話と同形式の話である。ただ、「左肩」でなく、「右肩」が「もっこ一つだけ低くなった」とする。これは、位置によって山容が異なつて見えるためであろう。ちなみに、弘前城あたりから岩木山を眺めると、赤倉山が右手に位置し、左手に位置する鳥海山より少し低く見える。

②現在の語り

岩木山の特徴あるさまを説明する話は、現在でもさまざまに語られている。筆者は弘前市外崎の学生Bさんから次のような報告を受けた。

昔々、岩木山がまだ普通の山の形であったころの話。岩木山には鬼が住んでいて、ある日、麓の村から子どもをさらっていつてしまった。そんな鬼に対し、山の神が「夕暮れまでにこの山に二

本の鬼の角を生やすことができれば、好きにさせてやるが、できなかったらお前を追放する」と告げる。鬼はさっそく石を積み上げ、まず一本の角を作った。次に二本目の角を作ろうとするが、鬼は疲れてなかなか角を作れない。石をあと一つ積みば完成というところで日暮れが来てしまう。鬼は結局、岩木山を追放された。その名残により、現在でも岩木山の形は、三つの角のうち、一つが欠けたようになっていたのだという。

報告者によれば、この話は直接姉から聞いたもので、姉はほかから聞いてきたという。昔、岩木山に住んでいた鬼が麓の子どもをさらったことから、山の神が「夕暮れまでにこの山に二本の角を生やすことができれば住まわせ、できなければ山から追放する」と告げる。鬼は完成させられず、追放されてしまう。それで、岩木山の三つの角のうち、一つが欠けているといった内容である。

岩木山の三つある峰のうち、なぜ一つが欠けているようになっていたのかを説明する話である。左右の峰を「角」と見立てたところにこの話の特徴がある。おそらく、一つが角のなくなったような形になっていることが不思議に思われて、それを説明するために形成された話であろう。

ここでは、山の神が子どもをさらう鬼に勝負を持ちかけている。そして、一定の時間内に定められた仕事量をこなせられるかを課題にする。結局、鬼は後少しのところまで終えられず、追放されたとなっている。したがって、先の車力の昔話と同形式の話といえる。

このように岩木山の姿に関して、同じ形式を取りながらさまざまに語られてきたことがわかる。山の神が登場するのは、麓の人々がこの神に加護を求めてきたからであろう。この話の場合、鬼は山の神によって駆逐される存在である。

また、次のようにも語られていた。平川市大坊の学生Cさんはこのような話を聞いていたという。

神様みたいな人から、左右の高さを同じにしないと言われ、鬼が同じ高さにしようとかんばって、一方ができたが、鬼が油断して寝てしまい、寝過ごして期日までに一方はできなかった。それで左右の高さが違うのだという。

これは、幼少の頃に読み聞かせの集まりに参加して、その折に聞いた話であるという。岩木山の左右の高さが違うのは、左右の高さを同じにするように命じられた鬼が寝過ごしてしまい、期日までにできなかったからだとする。これも岩木山の姿を説明する話の一つである。左右の峰の高さが違う理由を鬼の不注意によるとするところに特徴がある。ここでは、鬼が子をさらう、勝負に負けた鬼が山から追放されるといった要素はみられない。そのため、これまでに取り上げた話とは異なる形式の話といえる。

(3) 人に敵対する鬼

車力の昔話では、鬼が子どもをさらっていくとする。釈迦によって改心させられる前の鬼子母神の姿を思い起こさせる。先に取り上げた『津軽の民話』や『続々津軽のむかしこ集』の話では、鬼が子どもをさらって食うとする。そうした例からすると、この話で子どもをさらうとだけ述べるが、食うためだったと推測される。

人食い鬼の話は、津軽地方に広く伝えられてきたようで、鰺ヶ沢町には「鬼神」に関して次のような二つの話が伝えられている。

「もどらずの沢」

赤石川上流然ヶ岳^{しかりがけ}西面にある沢の名です。読んで字のごとく、はいったらもどることができない、おそろしい沢ということです。この沢へ山菜や薪木をとりに行って帰って来なかった人が、むかしは何人もありました。なんでも然ヶ岳東方斜面に大きな洞窟があつてここに鬼神が住んでいたとか。この鬼神が沢にはいつてきた人をとって食ったとか、連れていって働かせたのだとかいわれています。⁽¹²⁾

「脇の沢」

一ツ森裏側のこの沢は、人食沢、中沢、下の沢の三つの沢からなっています。(中略) 人食沢という気味のわるい名がついたのはわけがあつて、この沢にはいつて生きて帰った人はなかったのです。やはり鬼神がいて、人をとって食べたと言ひ伝えられています。⁽¹³⁾

このように鬼が人を取って食うという伝承がみられる。おそらく、鬼の恐ろしさを伝えるために、このような伝承が語られるようになったであろう。恐怖の存在であることを人食いによって説こうとしたのである。

とりわけ、子どもを食うとするところに特徴がある。これは、『雲国風土記』大原郡阿用郷条にみえる「目一つの鬼」の系譜に連なる伝承である。目一つの鬼が田を作る人の子どもを食ったという話だが、子どもを食えば、その家は子孫を失い、それはひいては地域の崩壊につながる⁽¹⁴⁾。したがって、鬼は人々の生活を脅かす恐怖の存在といつてよいだろう。

以上のようにこれらの昔話の存在から、津軽の人々は鬼を負の存在

として認識してきたことがわかる。一方、鬼沢の伝承のように鬼が水路を造ってくれたなど正の存在として伝えるところもある。そのほか、負の存在である鬼が正の存在に切り替わったとする話がみられ、注目される。次にその話を取り上げてみたい。

三 正の存在となつた鬼

(1) 鬼コにまつわる昔話

①事例

車力には次のような昔話も伝えられている。

撫牛子の鬼っ子

昔、浪岡のある婆さま、節分の日に風呂敷さ荷物いれで背負^{しょ}つて、橋渡つて戻ってきたら、向う^{むう}から赤鬼ど、小さい鬼こアオーンオーン、エーンエーンつて鳴いで橋渡ってきたど。

「この大雪の中、誰^だの家がらばらいで（おわれて）きたべなア」と、婆さまかわいそうになり、「待^まで、待^まで、待^まづれー、どつからきた」つて聞くと鬼は「村はずれの信作の家がらきた。なんだばつて節分で、福は内、鬼は外つて豆ぶつけるとどこで逃げできた」と言うので婆さま「俺^あだば吾^あ一人だはで、豆だけアまがねで、俺^あさあべ」。「それア有難^{ありがた}ども、今夜鬼沢のお宮^{みや}さ集ることねなつてゐるはでまいね（駄目だ）」と言つてドンドンどはけで（走つて）行つてしまったど。

ある日、婆さまお岩木山拜んでいだけア鬼のことアどしてらべ。ひとつ遊びにいつてみるがと、握りめし、沢山^{いづみ}持つて出かけた。鬼沢さ着いで村の人さお宮を聞いて行くと、鳥居さ大きな字で「鬼神社」と額^かがつっていた。婆さま汗をふき、お賽銭を上

げて拜んでゐると、中から白い着物に白足袋の神主^{たぬ}さま出てきた。「あのう、吾^あ浪岡の信作のとなりの家がらきたばて、鬼^あいねべか」と聞くと神主さま「ちょっと待^まつてけれ、いま西海岸の人達から頼まれで村守りに行つてゐるはんで、すぐど呼んでやるから」と拜むと間もなく帰つてきた。婆さま慶んだ慶んだ。見ると鬼の親子^あ虎の皮のふんどししめでいた。とても元気そうで角^{かど}アみじかくなつていた。

婆さま分けを聞くと鬼が言うには、人に迷惑をかけると、わるいので、良いことをして心の徳を積むと、角が短くなると言われるので、そのとうりに心掛け良^よくしていだら、本^{ほん}当^{たう}ね角短くなつたど。

今でも鬼沢と撫牛子のお宮の鳥居の鬼コ^いの角^{かど}ア短い^いアそしたわけだど。とつばれ。

②内容の分析

『前段』

a 昔、浪岡の婆が大雪の降る節分の日に橋のたもとで親子の鬼と出会う。

まず、節分という一年の時間が切り替わる時に、婆が鬼と橋のたもとで出くわしたとする。この背景に、節分といった境目の時には、鬼など負の存在が跳梁跋扈すると信じられたことがあげられる。また、橋は、人と人以外の者とを出会わせる場といえる。柳田国男『遠野物語』第一八話では、登場人物が「橋のほとり」で童女の「ザシキワラシ」二人と出会つたとする⁽¹⁶⁾。

b 婆は鬼を恐れないうえ、鬼の身の上を察して婆の方から声をかける。

ここに、婆の強さと心遣い、やさしさが窺える。普通であれば、驚

いて鬼が行くのをただ見守るだけか、逃げるかである。

c この鬼は節分の豆まき行事により家から追われてきたという。

この背景に、節分の豆まきによって鬼が家から払われると信じられたことがあげられる。この話に登場する鬼も人に追い払われる負の存在とみられる。

d 家族のいない婆は、隣の家から追い払われた鬼を自分の家に招こうとする。

婆は、疎ましい存在である鬼を家に迎え入れようとする。節分で追い払われた鬼を迎えて泊める話は、青森市浪岡の学生Aさんによれば、小さいときに「節分で追われた小鬼を家に泊めたという老夫婦の話」を聞いたことがあるという。

ここで、「厄神やくじんの宿やど」「鬼の宿」と呼ばれる習俗が思い出される。鬼など負の存在をあえて家に迎え入れ、接待することで災厄を免れようとし、さらに福徳に恵まれようとする習俗が全国に点々とみられる。⁽¹⁷⁾だが、ここでは災厄を免れようとして、福徳を求めたりはしない。すなわち、現世利益を求めない。損得抜きに、婆は鬼をただ迎え入れようとする。よって、「鬼の宿」とは異なる伝承と考えられる。

この話では、婆の困った者への素朴な同情心がきわ立っている。困った人がいると声をかけずにはいられない、思いやりにあふれた婆を登場させるところにこの話の特徴がある。それゆえ、この話の前段だけを取り出せば、困った人には誰であれ、無条件に助けの手を差し伸べるべきだという教訓譚とも受け取れる。困った人への積極的な働きかけを促す話といえよう。

e 鬼は今夜、鬼沢の神社に集まることになっていることから、婆の申し出を断る。

節分の夜に追われた鬼たちが鬼沢の神社に行くことになっていた。この背景に、鬼沢に鎮座する鬼神社が追われた鬼を迎え入れるところ

だと考えられたことがあげられる。鬼たちは豆まきで追い払われても、迎え入れてくれるところがあつた。それが鬼沢の神社だった。おそらく、鬼沢では鬼への畏敬の念から節分に豆まきをしないことや、鬼神社が鬼をまつることから、節分に際してよその土地で追われた鬼がこの社に逃げ込むと考えられるようになったと推察される。

節分に鬼が逃げ込むと伝える神社としては、埼玉県比企郡嵐山町の鬼鎮神社、東京都新宿区歌舞伎町の稲荷鬼王神社、奈良県天川村の天河神社などが知られる。天河神社の社家は前鬼・後鬼の子孫と伝えられ、「鬼の宿」と称して先祖の鬼を迎えるという。⁽¹⁹⁾

このように節分の豆まきによって家から追い出されても、鬼には逃げ場があつた。これは、負の存在である鬼が追い払われた場合、受け入れてくれるところがなければ暴れてしまう。そうならないようにするために考え出された、いわば安全装置といつてよいだろう。人と鬼とがうまく共存できるようになっていたわけで、これによりこの世の平和や秩序が保たれるということになる。

よって、この前段の話は、人と負の存在である鬼とが上手につきあってきたことを前提にして語られていると考えられる。

〔後段〕

f 岩木山を信仰している婆が、鬼を訪ねて鬼神社に出かける。

浪岡の婆が岩木山を拝んでいて鬼のことを思い出すのは、その方角に鬼が逃げに行ったことのほかに、岩木山には鬼がいると信じられていたことに基づくと考えられる。また、婆が鬼のその後を案じた上、実際に訪ねていくところに人のよさが現れている。婆の思いやりにあふれたさまがここにも窺える。

g 婆は神社の太夫から鬼の安否を確認しようとする。追い払われた

鬼は、西海岸の人たちの依頼によりその地を守りに行っていた。まず、追い払われた鬼が鬼神社に迎え入れられていたことを示す。

鬼神社が鬼たちの安息の場となっていた。次に、西海岸の人たちが鬼を迎えて村を守ってもらっていたとする。この背景に、地域によって人々の願いを聞き届けて鬼が訪れて村を守ると信じられていたことがあげられる。

h 婆が鬼と再会できた喜びを素直に表す。鬼は虎の皮の褌を締めて、角が短くなっていた。それは、鬼が人に迷惑をかけるとよくないと気づき、心がけをよくしていたからだだった。

婆は鬼と再会して大いに喜ぶ。ここに婆の率直さが現れている。鬼は虎の皮の褌を締めていた。これは、鬼が丑寅の方角にしていると考えられたことによる。

また、鬼が自ら改心し、独立してよその土地を守るという善行を積みようになる。そのため角が短くなったと述べる。自分たちの地区を守ってほしいという人々の願いを受けて善行を行い、その結果、悪鬼から善鬼になったしとして角が短くなったというのであろう。

鬼が人々に恩恵を与える存在に切り替わったことが示される。心掛け次第でどんな悪人でも善人に切り替わることができるという教訓譚になっているともいえる。要は、後段の話は心の修養を説き、善行を勧める話としても位置づけることができる。

i 鬼沢と撫牛子のお宮の鬼の角が短いのはそのためだという。

鬼沢に鎮座する鬼神社と撫牛子に鎮座する八幡宮の鳥居の鬼の角がなぜ短いかを説明しようとする。話の末尾にこうした一文があるのは伝説によくみられる形式である。この話は昔話の形式を取りながら事物の由来譚になっている。

鬼神社の鳥居の鬼の角が短いというのは、この社の大鳥居の額に記された「鬼」の字に角がないことをさすのであろう。「鬼」とあつて、これは当社の鬼には角がないことによるという。また、撫牛子の鬼のことがここに出てくるのは、当地の神社の鳥居にある鬼コが角が短い

という特徴を持つことからよく話題に登場し、それでここに取り上げられるようになったと考えられる。

撫牛子に鎮座する八幡宮の鳥居を見ると、額を掲げる位置に鬼の彫り物が飾られている。地元では「鬼コ」と呼ばれ、加藤慶司氏によれば、幼いときに当神社の境内で「撫牛子の鬼コにツノコネー、西郷隆盛首タコネー」とうたいながら遊んだという⁽²⁰⁾。また、棟方志功がこの鬼コを見て大変おもしろがり、鬼コの名称やそのいわれを知ろうとしたが、誰もわからず、「撫牛子の鬼コ、名無し鬼かな」と嘆いたというエピソードがあるという⁽²¹⁾。そのほか、観光バスが立ち寄るほどで、最近では旅のガイドブックに鬼コが取り上げられている。その記事に「鬼神社に鬼の姿はありません。話によると、悪さをした鬼たちが鬼神社に集められ、守り神として改心した後に、独り立ちして各神社の鳥居にいるそうです」⁽²²⁾とある。ここに当昔話に似た話が紹介されている。鬼沢の鬼神社に悪い鬼たちが集められ、改心した後、独立して各地の神社の鬼コとなったと説いて、なぜ鬼神社に鬼の姿がないかを解説しようとしている。また、当地の鬼コは弘前市中崎に



鳥居の鬼コ



撫牛子 八幡宮の鳥居

ある神社の鬼コと向き合っているとか、鬼沢の鬼と向き合っているという。⁽²³⁾

このように撫牛子の鬼コは有名で、角が短いことで知られてきた。なぜ角が短いのか、その理由を聞こうとする人がいるため、このような話が語られるようになったのであろう。そして、鬼沢の鬼と組となつて語られるようになったことを背景にして、「鬼沢と撫牛子のお宮の鳥居の鬼コの角が短い」というようになったのであろう。

後段の話は、鬼でも自らの悪行をやめる。では、人はどうかと、人々に自覚を促すための話とも受け取れる。

以上のように分析できるが、この昔話の内容で注目される点は、鬼が村守りをする点と自ら改心して善行を積む点である。次に、これらの点に絞って考察してみたい。

四 改心して善行を積む鬼

(1) 鬼の村守り

鬼が「村守り」をするという。これは、鬼コが悪魔を払うと信じられた。そこで、そうした機能を持つ鬼を飾って地区を守ろうとしたことに基づくのではなかろうか。この背景には、鬼は悪魔に対抗できる力を持つと考えられたことがあげられる。撫牛子の八幡宮の鳥居に掲げられた鬼コは、歯をむき出しにして通る人を睨みつけている。おそらく、鋭い眼力を持ち、いかめしい異形の姿の鬼がいることで悪魔が追い払われ、村が守られるという考えから、鬼が村守りをするという発想が生じたのであろう。

この鬼コは、津軽独特の風習として注目されてきた。この鬼コに関して総合的な調査を行った加藤氏によれば、岩木川流域を中心として三八か所にみられ、撫牛子の八幡宮の鳥居に飾られたものが最初であ

るといふ。地元の上親会が神社境内に建てた案内板に次のようにある。

鳥居の鬼コ

「撫牛子の鬼コに角コ無エー」

「西郷隆盛に首タコ無エー」

とわらべ唄に歌われて来たこの鬼コは悪霊を防ぐ魔除のために氏子一同が鳥居にあげたものである。最初の鬼コは甲冑師高山玄南作の木彫であったが、昭和二十六年の大火で焼け落ち、ここに見える鬼コは大正八年に石工櫻庭音吉氏がこの鳥居と共に工費千五百円で制作したものである。

霊験あらたかな鬼コの話聞いて、柏木町、日沼、種市、沖等次々に鬼コをあげて、悪霊、悪疫の退散は勿論、さらに鬼の神通力にあやかつて強い子供を育てたいと祈願するようになったのである。これは、全国的に極めて珍らしい津軽独特の神社信仰である。

平成元年七月吉日

撫牛子 上親会建之

陸奥史談会役員 加藤慶司選

加藤氏の調査によれば、現在の鬼コは初代のものを模倣したもので、初代の鬼コは高山玄南が明治初年に作ったものであるという。廃藩後、剃髪して和徳高崎の法華寺庵主となり、玄南和尚と称した。この玄南は片山家に生まれ、金具師兼甲冑師で、木彫りにも優れていたと伝えられている。また、鬼コを飾った理由として「悪霊が村に入らないように、木製の大鳥居に木製の鬼コをあげた」と伝えられ、「鬼板（額束のことを当時の大工は鬼板といった）の代わりに鬼コをあげたので、鬼が肩で鳥居の鳥木を力強く支えていた」という。⁽²⁵⁾これらの言い伝えから、鳥居の額が「鬼板」と呼ばれたことが契機となつて、そこに悪

霊除けの鬼像を飾る趣向が考え出されたものと推測される。

要は、悪いものを追い払いたいという地元の人々の切実な願いにより、鬼が悪魔を払うという機能を持つことから、人々を守護する存在としてまつられるようになったのであろう。撫牛子の鬼コは評判を呼んだようで、そうした鬼コを鳥居に飾る風習が明治期以降、岩木川流域に限定されるものの、瞬く間に広がったらしい。そうすると、先の昔話は鬼コを話題にすることから、近代になって形成された話と考えられる。

(2) 悪鬼から善鬼へ

この昔話では、自ら改心して善鬼になったと説く。善鬼から悪鬼に変わるといふ話は、仏教の力で鬼を改心させたとする例が思い出される。たとえば、奈良県吉野郡吉野町の金峯山寺蔵王堂の節分会において、全国から追われた鬼を迎え入れて、仏教の力で改心させるという⁽²⁷⁾ところが、この話では仏教の力などは借りない。自ら気づいて改心している。この点に特徴があると考えられる。では、なぜ自ら気づいて改心し、善鬼となったのであろうか。

第一に、見返りを求めない人との出会いがあげられる。先に触れたように、婆が節分の豆まきによって追い払われた鬼に声をかけ、あえて家に招こうとする。ここで婆は何の利益も求めない。ただ困っている鬼を見かねて迎え入れようとする。無条件に援助の手を差し伸べようとするわけで、純粹におもいやりの心から出た行為と考えられる。そこには無償の愛が感じられる。こういった人物の慈悲深さに触れたことから、鬼は人に迷惑をかけることを自ら放棄せざるを得なくなったのではなからうか。要は、見返りを求めない人物との交流がきっかけとなって、鬼は改心したものと考えられる。

第二に、鬼神社に迎え入れられて人々にまつられたことがあげられ

る。先に述べたように、鬼神社は節分の晩に追い払われた鬼たちにとつて安息の場所であった。この神社では、鬼は神としてまつられる。この背景に、鬼の力に期待する人たちの存在がある。追い払われた鬼たちは人々のまつりを受けて荒ぶる心が鎮まって負の気持ちがなくなり、心を改めるようになったのではなからうか。鬼神社の存在も関わって、鬼は自ら改心したものと思われる。

五 まとめ

伝承の実態からいうと、次のように考えられる。

今日、津軽では一般に子どもをさらうなど負の存在としての鬼が語られる。その一方で、人々に恵みを与える正の存在としての鬼が語られるところがある。それは弘前市鬼沢である。また、鯺ヶ沢町大然⁽²⁸⁾には、ある家が鬼と仲良くして、一夜のうちに水田が耕作されたのはその鬼によるとされた。ただし、節分の豆まきによって、その仲も途絶えてしまったという話があり、この地もその一つといえる。

そして、鬼が自ら改心して心の修養を積み、善行を行うようになってきたとする昔話が語られるようになっていく。すなわち、鬼が負の存在から正の存在へと切り替わったというのである。その背景に、津軽における人と鬼との交流の歴史や、津軽の人々の鬼へのおもいやりと畏敬の念があると考えられる。

この昔話は、内容からいって、負の存在としての鬼を主人公にする話と正の存在としての鬼を主人公にする話との中間的な位置にあると考えられる。先に指摘したように、鬼コや鬼をまつる地区の存在が関わってこうした話が形成されてきたのであろう。それから、人々に正の存在としての鬼が少しずつ受け入れられてきたことも関わる。新聞やテレビなどマスコミに鬼コや鬼神社のことが折に触れて取り上げ

られてきたことが大きいかもしれない。

要は、鬼を負の存在とばかり思っていた人々が鬼コや鬼神社の伝承に触れて正の存在としての鬼を知り、それが契機となって鬼への認識を改めるようになる。負の存在の鬼が正の存在に切り替わったという語りがなされるようになったのは、そうした状況に基づくものと考えられる。

従来、津軽の鬼についてはその原像が求められてきた。本稿は、今日の津軽における鬼にまつわる昔話を取り上げて、その伝承実態を述べるとともに、現代において人々が鬼をいかに受けとめているかを明らかにした。皆様のご批判をお願いする次第である。

注

- (1) 大湯卓二「青森の鬼」(『東北の鬼』 岩手出版 一九八九年 二七頁)
- (2) 畠山篤「岩木山麓の水利伝承—津軽の大人—」(『鬼 伝承—「地域総合文化研究所紀要」 第九号 一九九七年六月 二八頁)
- (3) 内藤正敏氏は「ミイラ信仰の研究」(大和書房 一九七四年 一五五頁)において「古代製鉄技術者集団」を取りあげて、「鬼神社伝説の場合も里の農民に大灌漑工事をこなしたり、その神社のご神体が鉄の鍬であることから明らかに鉄製の農具で里人を助けていたことがわかる。ある時代までは製鉄民としての山人と、水稲農耕民の里人とは協調関係にあり、里人は山人のつくる鉄製品に大きな恩恵をうけていた」と説く。そして「鬼の原風景—津軽岩木山の鬼神」(『フォークロア』 第一号 一九九四年三月 六一—六四頁)において、その製鉄民は渡来人ではないかと述べる。
- (4) 若尾五雄『鬼伝説の研究—金工史の視点から』 大和書房 一九八一年 一三七頁
- (5) 山田巖子編『弘前市鬼沢 鬼神社の信仰と民俗』 弘前大学人文学部文化財論講座 二〇一四年 二頁
- (6) 拙編「鬼をめぐる文献目録」(『フォークロア』 第一号 一九九四年三月 二二九—一三七頁)
- (7) 川合勇太郎『青森県の昔話』 津軽書房 一九七二年 四〇八—四〇九頁
- (8) 旧車力村牛湯の明治三十二年生まれの方によるという(北沢得太郎『車力の民話』二

巻 車力村教育委員会 一九九五年 二〇七—二〇八頁。

(9) 注(8)に同じ。二六頁

(10) 斎藤正編『津軽の民話』 未来社 一九五八年 一〇六—一〇八頁

(11) 斎藤正編『続々津軽のむかし集』 弘前教職員組合文化部 一九六二年 一八八—一八九頁

(12) 鯉ヶ沢町教育委員会郷土読本編集委員会編『続ふるさとあじがさわ』 鯉ヶ沢町教育委員会 一九七三年 二七頁

(13) 注(12)に同じ。二九頁

(14) 拙稿「出雲国風土記」大原郡阿用郷条をめぐる「鬼一口説話考」(『古典と民俗学の会編』『古典と民俗学論集—桜井満先生追悼—』おうふう 一九九七年 三八—頁)

(15) 注(8)に同じ。一五八—一六〇頁

(16) 柳田国男『遠野物語』 聚精堂 一九一〇年(『柳田国男全集』 第二巻 筑摩書房 一九九七年 二〇頁)

(17) 大島建彦『疫神と福神』 三弥井書店 二〇〇八年 五三頁

(18) 三崎一夫「正月行事における疫神鎮送について」(『東北民俗』 第五輯 一九七〇年 四二頁)には「八戸市 正月、神棚の端に疱瘡神に供えるといつて赤い紙を敷いて重ね餅を供える」といった青森県の例が紹介されている。

(19) 谷川健一編『日本の神々—神社と聖地』 第二巻 白水社 一九八四年 二八九頁
谷川健一編『日本の神々—神社と聖地』(第四巻 白水社 一九八五年 五三四頁)には、天河神社における節分の鬼迎えの様子が記されている。

(20) 加藤慶司「神社と鳥居の鬼コ」(『陸奥史談』 第四九号 一九八五年六月 九頁)

根岸栄隆『鳥居の研究』(厚生閣 一九四三年 二七六頁)には、「弘前の古い童謡に『大高源吾に鼻子が無い、撫牛子の鬼子に角が無い』と云ふのがあつたさうだ」とある。北原白秋編『日本伝承童謡集成』 第五巻(『国民図書刊行会 一九五〇年 一八三頁)にも「大高源吾に鼻コ無い、ないじよしの鬼コに角コ無い。『青森』といった歌詞が紹介されている。

(21) 船水清「わがふるさと」 第四編 陸奥新報社 一九六三年 一〇三頁

(22) 『青森女子旅』 グラフ青森 二〇一五年 五一頁

最近では、弘前観光コンベンション協会によって「津軽の厄払いと鬼っこツアー」と称して、旧暦の元日に行われる鬼神社のしめ縄奉納裸参りと撫牛子八幡宮などの

鬼コを見学するツアーが企画された。

(23) 注(21)に同じ。

(24) 福士壽一「津軽の鳥居の鬼コの背景」とくに役行者(観音)と毘沙門天(鬼)との関連において」(弘前学院大学地域総合文化研究所編『地域学』四巻 二〇〇六年 八九頁)

(25) 注(20)に同じ。資料3、および本文二・三頁

(26) 加藤慶司著・発行『津軽における鳥居の鬼コ』一九九八年 五頁

なお、『あおり草子』一二三三号(二〇〇〇年二月)は「鳥居の鬼コ」と題する特集号で参考になる。

(27) 大石奉夫「役行者伝説」(桜井満・岩下均編『吉野の祭りと伝承』おうふう一九九〇年 一三四頁)には、節分会において「全国で追われた鬼をここに集め、法華懺法の法力によって仏道に入らしめる」とある。

(28) 注(12)に同じ。三〇・三二頁

〔参考文献〕

根岸栄隆『鳥居の研究』厚生閣 一九四三年

船水清『わがふるさと』第四編 陸奥新報社 一九六三年

三崎一夫「正月行事における疫神鎮送について」(『東北民俗』第五輯 一九七〇年)

内藤正敏『ミイラ信仰の研究』大和書房 一九七四年

若尾五雄『鬼伝説の研究—金工史の視点から』大和書房 一九八一年

坂本吉加『津軽の伝説』2 北方新社 一九八八年

大湯卓二ほか『東北の鬼』岩手出版 一九八九年

山本節『伝承の宇宙—昔話・伝説・噂話にひそむもの』溪水社 一九九二年

拙稿『出雲国風土記』大原郡阿用郷条をめぐる一鬼「口説話考」(『古典と民俗学の会編』『古典と民俗学論集—桜井満先生追悼—』おうふう 一九九七年)

加藤慶司著・発行『津軽における鳥居の鬼コ』一九九八年

花部英雄『漂泊する神と人』三弥井書店 二〇〇四年

福士壽一「津軽の鳥居の鬼コの背景」とくに役行者(観音)と毘沙門天(鬼)との関連において」(弘前学院大学地域総合文化研究所編『地域学』四巻 二〇〇六年)

大島建彦『疫神と福神』三弥井書店 二〇〇八年

関根達人編『弘前市鬼沢鬼神社奉納品の調査報告』弘前大学人文学部文化財論講座

二〇一三年

山田巖子編『弘前市鬼沢 鬼神社の信仰と民俗』弘前大学人文学部文化財論講座

二〇一四年

「岩木山を科学する」刊行会編『岩木山を科学する』2 北方新社 二〇一五年

畠山篤『岩木山の神と鬼』北方新社 二〇一六年

加藤慶司「神社と鳥居の鬼コ」『陸奥史談』第四九号 一九八五年六月

内藤正敏「鬼の原風景—津軽岩木山の鬼神」『フォークロア』第一号 一九九四年三月

拙編「鬼をめぐる文献目録」『フォークロア』第一号 一九九四年三月

畠山篤「岩木山麓の水利伝承—津軽の大人(鬼)伝承—」『地域総合文化研究所紀要』第九号 一九九七年六月

〔付記〕

調査では、撫牛子の方々に大変お世話になった。また、本学の学生諸氏に資料を提供していただいた。ここに記して感謝申し上げます。